

ヨコハマアートサイト

季刊
vol. 045
2025

岩葉町ウオーフで行われた「ヨコハマキネマストリート」トークイベントに登壇された横浜シネマリンの支配人・八幡温子さん



〔特集〕つながる地域の舞台

特集
一つながる地域の舞台

「舞台」が発表や鑑賞のための場にとどまらず、人々が出会い、ともに時間や空間をつくる地域の場として開かれたとき、どんな可能性が見えてくるのでしょうか。地域の舞台は、そこに集まる人々の声から見えてくる地域の課題に取り組むための出発点になるかもしれません。各地域で紡がれている関係性や、そこから立ち上がる表現のあり方をご紹介します。



横浜若葉町計画 若葉町ウォーフによる企画「ヨコハマギネマストリート」では、かつて存在した映画館の跡地を巡るまち歩きを実施し、映像作品として上映した



横浜こどものひろば 《大きなかぶ》公演の様子



みんなのダンスフィールド インクルーシブダンスワークショップ「のはらハみどり」第7期の発表会の様子



2017年にオープンした民間のアートセンター、若葉町ウォーフの外観

中区若葉町でアートの活性化に取り組む若葉町計画。

文化が行き交う港をイメージして誕生した若葉町ウォーフを拠点に、

まちの創造性を豊かにするさまざまな企画が生まれている

横浜若葉町計画

波止場で集まるアート

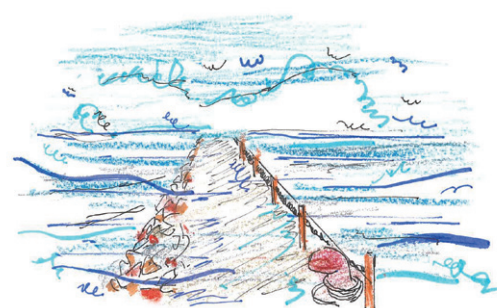
一般社団法人横浜若葉町計画は、中区若葉町でのアートの活性化に取り組んできた。拠点は2017年に誕生した若葉町ウォーフだ。民間のアートセンターであることを活かし、積極的に劇場の活動をまちに開いている。ウォーフとは波止場を意味し、人や文化が行き交う港のように出会いや交流の場所となることを目指して名付けられた。1階に劇場、2階にスタジオ、3階に宿泊施設を備え、若手アーティストやアジアとの協働を試みている。2019年度には「まちなかギャラリー」を開始。世界で活躍する書道家や美術家の個展、中国の小劇場とのシンポジウムなど、国際的なプログラムによって地域と世界をつなぐ企画に取り組んだ。しかしコロナ禍に見舞われた2020年度を転機に、住民が創作に参加できる企画の開催に舵を切った。これまで秋祭りやラジオ配信、マルシェや茶話会等といったイベントの数々がこの劇場から行われた。



横浜シネマリンの支配人・八幡温子さんと横浜市内で活動する映画監督・吉本直紀さんの「ヨコハマキネマストリート」トークイベントの様子

井戸端から生まれる関係

若葉町ウォーフでは隔週で井戸端会議が行われている。近隣の文化施設関係者や団体、住民らが集い、肩の力を抜いて近況を語り合う。目的を持たない雑談こそが、地域の創造力を育むという考えのもとで始まった。参加者のなかには、近隣取材した手づくりの冊子を持ってきたデザイナーや、隣町での展示を告知するアーティストの姿も見られ、横浜で今どのような活動がされているかといった情報を得ることができる。告知だけでなく、活動における困りごとの相談もできるような雰



困気があった。2021年度から2023年度にはこの地域で暮らす子どもに向けたワークショップが行われた。多様なバックグラウンドの子どもたちが多く暮らす若葉町だが、日常における住民間のコミュニケーションは少ない。まちの人が劇場の前をせわしなく行き交う光景を見て、子どもの遊び場づくりに取り組んだ。目指したのは、個々の主体性を引き出せる創作の場をつくり、経済的な負担を感じることなく、自由に出入りできる劇場。次第に、アートをきっかけにご近所同士で助け合えるような関係性が生まれていった。

地域との対話の場

2025年度は、若葉町にかつてあった映画館の歴史をたどる企画「ヨコハマキネマストリート」を実施した。展示やトーク、上映を通して、地域と映画文化のつながりを掘り起こしている。ゲストに横浜シネマリン支配人の八幡温子（やわたあつこ）さんを迎えたトークイベントでは、設立からかわっているスタッフが「東京で長く仕事をしてきましたが、拠点を持って活動する意味をあらためて考えたとき、思い浮かんだのはこの町でした。昔から好きだった場所です。あちこちに映画館があって、横浜は文化の息づくところだった。そんな記憶が、ここに来るきっかけになりました」と語った。八幡さんは、倒産の危機にあった名画座を引き継ぎ、横浜の映画文化を守り続けてきた。若葉町ウォーフとの交流は、井戸端会議をきっかけに始まったという。会場は登壇者／参加者の垣根を越えた静かで温かな一体感が生まれた。アートから人と人の交流の生まれるこの波止場には、そこで暮らす人の声やその存在が確かにある。

横浜若葉町計画

<https://yokohamastory.globa.com/>



トークイベントはまちの人も一緒に話す場となり、会場からはたびたび笑いも



横浜市内の芸術表現にかかわる人々が「私の好きな映画」を語る映像の上映もあった



築50年のビルを改装したアートセンター。1階ではさまざまなプログラムが行われる

アートで人と人の交流が生まれる波止場（ウォーフ）から

地域の創造的な関係性が生まれる

横浜こどものひろば

一緒につくる舞台

舞台鑑賞や表現をする機会の創出を通して、子どもと保護者を対象に地域での出会いの場を生み出してきたNPO法人横浜こどものひろば。1978年に設立され、その社会的な活動の歩みは長い。公共施設や地域団体との共催により、活動は多世代的な広がりもみせている。かつて横浜こどものひろばで活動していた人たちが始めた新たな地域の間との連携も団体の強みだ。会員向けの公演にとどまらず、子どもが集まって遊ぶ場や野外活動、おやこまつりといった地域の人誰でも参加できる機会も大切にしてきた。舞台鑑賞では、参加者は準備やワークショップからかわり、文化を共につくる体験をする。事務局長の谷崎悦子さんは「手づくりの店を企画したり、段ボールで秘密基地をつくったりと、遊びの要素を加えたイベントはかけがえのない体験の場です。娯楽があふれる今の時代だからこそ、手間をかけて一緒に作りあげるプロセスは、地域で人と人を結ぶ貴重な機会です」と話す。

地域の生の声が集まる広場

「私たちは地域から出てくる生の声をとても大事にしています。それがいけばん確かな情報だと思うからです」と話すのは、鶴見区の南部・潮田での活動にかかわる運営委員長の杉山仁美さん。地域の子育て支援や青少年育成を担う団体と区民が集まって開催するイベント「つるみ子育て・個育ちフォーラム」の参加団体としてかかわるなかで、同じ鶴見区内でも地域課題に違いがあることに気づき、潮田の外国につながる子どもたちに関する課題にアプローチしている。その一つが、多文化



子どもから大人まで楽しむワークショップの様子



人形を媒介にすることでコミュニケーションがとれるようになった人見知りの子どももいたという

の子どもたちに向けた、人形劇団ひとみ座による人形劇《パンチくんおおあばれ》の上演。本劇は言葉がなくても伝わる演目だ。一方、同じ鶴見区内の寺尾地域ケアプラザでは、高齢者向けデイサービスの利用者を招き、演劇集団円の俳優とともに《大きなかぶ》を上演した。繰り返しのシーンが印象的なこの物語に、認知症のある利用者も一緒に笑い声をあげ、会場には世代を問わずにお話を楽しむ一体感が生まれた。演者はこうした瞬間に「観客も舞台をつくる仲間だ」と気づかされたり、笑顔があふれる会場の雰囲気を感じたという。文化を楽しむことを通して人々が集うことで、地域での世代を超えたつながりが生まれている。

見ること、あそぶこと、地域とつながること――

子どもも大人も文化を楽しむことを通して集い、

地域での豊かなつながりを生み出す



横浜こどものひろば

<https://www.yokohama-kodomo.com/>

表現のなかで出会う

舞台から目いっぱい、伸ばされた手。インクルーシブダンスワークショップ「のはらハみどり」の発表の幕が上がる。と、未就学児から高齢者、車椅子ユーザーや特別支援学校の子どもたち、障害の有無にかかわらず集まった演者たちが笑顔でこちらに手を振っている。まるで観客とハイタッチできそうだ。



インクルーシブダンスワークショップ「のはらハみどり」第7期の発表会。布を追いかけるシーンで、子どもたちはそれぞれのタイミングで駆け出していく



ワークショップの様子。お互いを感じとり合いながら表現を共に作りあう



公演が行われた「みどりアートパーク オープン・デー」ではロビーコンサートやピアノリサイタルなどが無料開放され、地産地消マルシェや県立高校の美術部による陶器市、ギャラリー展示などが行われた。子どもから大人まで市民みんなで楽しむ姿があった。

NPO法人みんなのダンスフィールドは、誰もが身体を通して表現できる場をつくっている。互いに支え合う関係が育まれるのは舞台上だけではない。舞台裏でも大人の参加者が子どもの参加者を見守り、絵本を読んだりして、作品のイメージを広げたりする姿がある。今回の舞台でファシリテーターをつとめたのは、障害のある人と日常的にかかわりながら、障害福祉分野でアートに実践的に取り組んでいる遠田ひな乃さん。遠田さんは「みんなのダンスフィールドが大切にしている表現『てあわせ』は、相手の手と自分の手を合わせて一緒に踊ります。相手の表現を感じながら、即興的に身体で表現します。お互いの表現を尊重し、どんな人とも一緒に創作ができる。共創の喜びを感じられるダンスです」と他者と表現のなかで出会うことの可能性を語った。

ダンスが地域をやわらかくする

当初からワークショップに継続して参加している中学生が書いた作文には「最初どう接したらいいかわからず、戸惑ったけれど、ダンスで誰とでもコミュニケーションが取れるようになった」という言葉があった。発表の会場となったみどりアートパークでは、幼稚園児から高齢者まで、近隣に暮らす人々が舞台を見守った。「自由な表現に感動した」「社会がこんなふうになったらいいな」といった感想も寄せられ、ワークショップで育まれた表現が地域住民へ届く機会となった。保育者の経験を活かしながら活動に携わる井出真結子さんは「ボランティアで来た学生さんのなかには、ここで初めて世代や障害の有無を超えた出会いを経験した人もいました。最初は緊張や戸惑いもありますが、身体表現を通してそれぞれに変わっていく姿があるんです。笑顔で自分から話しかけたり、一緒に動き出せるようになりました」と話した。井出さん自身もまた、日々の仕事における子どもとのかかわり方に変化があったという。みんなのダンスフィールドの活動は参加者の心と体をほぐし、のびのびと地域に歩み出していけるよう支え合える人材を育成する場にもなっている。

あらゆる人が自由に創造し、生き生きと表現する場に向かって



テーマ さわってみる～視覚障害とアート、これからの関係

ゲスト 今泉梨香(ひよこの会代表)

KYON.J(写真家)

大原万季(神奈川県立近代美術館学芸員)

佐藤玲子(川崎市岡本太郎美術館学芸員)

聞き手・進行 小川智紀(ヨコハマアートサイト事務局) 日時 2025年10月3日(金) 会場 象の鼻テラス



ラウンジの様子

今回のテーマは「さわってみる～視覚障害とアート、これからの関係」。場所はひよこの会主催「ノールックみゅーじあむ」イベント会場である象の鼻テラスで開催されました。ゲストには、横浜市を拠点に視覚障害児とその家族をサポートする「ひよこの会」代表の今泉梨香さん、写真家のKYON.Jさん、神奈川県立近代美術館学芸員の大原万季さん、川崎市岡本太郎美術館学芸員の佐藤玲子さんを迎えました。

神奈川県立近代美術館の大原万季さんからは鎌倉別館での「これもさわれるのかな? -彫刻に触れる展覧会II-」の事例が語られました。鑑賞者が作品に触れることを前提に展示台や素材を工夫し、修復担当者と連携しながら進めた企画です。石や木、ブロンズの手触りや、音や振動を楽しめる立体作品など、触覚ならではの鑑賞体験を意図して作品を選ばれた点が印象的でした。

続いて、岡本太郎美術館の佐藤さんからは、クラウドファンディングを契機に始まったインクル

ーシブな取り組みが紹介されました。点字付きの作品紹介カードを制作し、輪郭を浮かび上がらせた触図と拡大文字、着色を組み合わせることで、より多様な鑑賞方法を模索しています。ブラインドコミュニケーターとの取り組みも、継続して進めています。

ひよこの会の今泉さんは、「ノールックみゅーじあむ」を通して、子どもの主体的な表現が広がっていることを報告。また、KYON.Jさんは触れる写真や香りを組み合わせたワークショップを展開し、見える／見えないの違いを越えた感覚の共有の可能性を示しました。

ディスカッションでは、今泉さんから当事者家族としての意見を聞くことができました。親子でおしゃべりしながら鑑賞できる場の必要性や、保護者以外の人と感想を交わすことが大切な機会となることなど、美術館の今後のあり方を考える機会となりました。

ヨコハマアートサイトラウンジとは

地域におけるつながりやネットワークを広げ、コミュニティの活性化を図ることを目的とし、横浜というまちでアートと地域の関わりについて考える交流と研修の場です。

事務局うろうろ日記

ヨコハマアートサイト事務局は、
今日も横浜市内のあっちこっちへうろうろしています

9月12日 金曜日



新高島駅の地下に6月にオープンしたArt Center NEWで開催された「NEW PLATFORM - Alternative ASIA」へ。アートのスペースを自ら運営するアーティストや仲間と協働で活動するチームが、アジア各地から31組集まった。クラブ音楽が流れる会場は熱気に包まれ、賑やかに交流し展望を語る機会となった。

9月17日 水曜日



こくらやま実行委員会による「こくら山ほぐし会」へ。これは、大倉山の商店街にある障害福祉事業所「アートかれん」のメンバーがアーティストたちとまちにくり出して、事業所の活動を地域に開く試みだ。近隣の店に立ち寄り寄るほか、公園ではシャボン玉を吹きながらみんなで踊る開放的なひとときを過ごした。

10月3日 金曜日



横浜駅西口からすぐにあるデパート、ジョイナスの屋上「ジョイナスの森彫刻公園」で昼休みのひとときを過ごす。ここは会社員や買い物客にとっての憩いの場となっている。緑豊かな空間がまちなかとは思えない。場を彩る彫刻作品も力作ぞろいだ。公園の小道から間近で作品を見ることもでき、芸術が思いのほか身近に感じられた。

10月9日 木曜日



横浜を拠点とするアジアのコレクティブBubba Bubbleによる「熱熱仲乃湯」が南区中村町にある銭湯・仲乃湯で開催された。現代アーティストたちの作品群が、湯船の上や天井、ロッカースペースなどにダイナミックに展示される。アート作品をきっかけに常連客とのコミュニケーションも生まれ、心も温まった。

ヨコハマアートサイトとは

横浜市地域文化サポート事業。地域課題に対して文化芸術の持つ創造性でアプローチし、地域コミュニティに寄与する取組を支援する事業です。

事務局・お問い合わせ

ヨコハマアートサイト事務局（認定NPO法人STスポット横浜、横浜시에ぎわいスポーツ文化局）
〒220-0004 横浜市西区北幸1-11-15 横浜STビルB1F（認定NPO法人STスポット横浜 地域連携事業部 内）
TEL：045-325-0410 FAX：045-325-0414 MAIL：office@y-artsite.org WEB：https://y-artsite.org
SNS：https://twitter.com/Y_Artsite https://www.facebook.com/yokohama.artsite

季刊ヨコハマアートサイト vol.045

発行：ヨコハマアートサイト事務局
編集：認定NPO法人 STスポット横浜 編集協力：大谷薫子 取材・テキスト：小川智紀、松橋萌、田中真実 イラスト：松橋萌
デザイン：岡部正裕 印刷・製本：共進印刷株式会社 発行日：2025年12月31日
季刊誌についてのご意見・ご感想お待ちしております。